

昭和十九年敗戦の色濃くなった七月北ボルネオに日本軍占領政策の一環としての、現地に施政官として派遣され、仕事は食糧の調達であった。つまり体のいい国外追放である。マラリヤ病、糖尿病、肺結核と病と闘いながらの生活であった。

敗るべくして敗れた侵略戦争も終結し、舞鶴に帰還上陸して浮浪者のあまりに多いことをまのあたりに見て自分の子供もこのたぐいではないかと目頭があつくなつたという。

懐かしい故郷に帰りすぐ農協の専務として執務のかたわら、大沢久明等と行動を共にし青森県社会党を結成した。天皇制体制の崩壊、インフ

レ、農地改革等と世情騒然たる時代であったが、増田さんは農民組合組織をバックに、県下では新城村と嘉瀬村から始めて社会主義者の村長が出現したわけである。任期半ばで病のため昭和二十四年五月十六日この世を去ったが、没後も農民運動のカリスマ的存在であった。

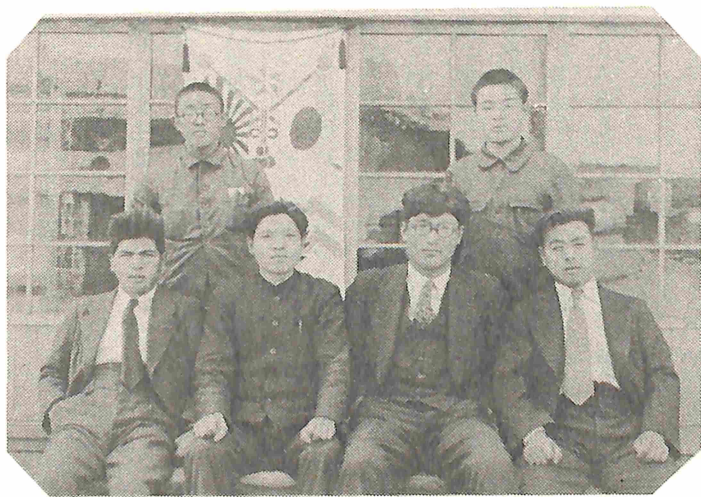
最後に記者的な悪根性ではないが、二人の出逢いの道を問いましたところ、小柄なキクさんはポツと顔を朱に染め、遠い昔日を想い出すがごとくプロレタリア文学を通じて長い交友であり、結婚まではいろいろな曲折があつたと語ったことは実に印象的であった。

## 増田千代吉さんの思い出

小山内 嘉一郎

私が小学校（昭五―一〇）の頃、鍛冶町の今の津田清水さん宅が産業組合（農協の前身）の事務所であった。俗に組合と呼んでいたが、その組合では肥料、農具、日用品、雑貨から学用品まで売っていた。ノートが一冊五銭の市価に対し組合では三銭で売っていた。

その産業組合に、六尺豊かな一見外人かと思われる大男が、専務として勤めていた、当時二十台であろう。係りの人が不在の時などその大男が、学用品を売ってくれた、見かけによらず親切であった。それでも私は子供心にも、怖い人だという先入観があつた。それ



前列左から内海武七さん、平川清作さん、故増田千代吉さん、故山中市太郎さん  
後列左から小倉秀光さん、秋元武治さん 昭和14年5月

は増田さんが共産党であると聞いていたからである。戦前の非合法化時代だから、みんなが敬遠していたようである。

組合はその後、一時は今の沢田茂さん宅あたりに大きな郷蔵があつて、それを事務所としたが、間もなく、現在の農協の所に移転した。昭和十二年頃だと思う。組合がどこへ移ろうと、物が一般の店より安いのが魅力でよく買に行った記憶がある。

私が小学校を終つてから、軍事教練を主とした青年学校（夜学）に通つた。小学校舎が青年学校としても使われた、私は十四歳で青年団にも入り、先輩の小使役であつた。そして木立民五郎さんのリードする青年愛郷会にも入るといふ多感な頃である。昭和十八年の夏のある夜、教練が終つて宿直室へ行ったら異様な情景を見た。増田さんと木立さんが仲よく将棋をさしていた。先日木立さんにそのことを話したら、『よく増田さんと飲んだよ』とのこと、矢張り嘉瀬が生んだ両雄の足あとを探つた思ひである。

戦争は益々苛烈を極め、私も出征して十九年、二十年のふるさとの出来ごとは、何も知らないが、聞くところでは、増田さんはその後南方の戦線へ、木立さんも村長在職のまま応召されたり、理由もなく警察に引張られたりした由、戦争の嵐は国民大衆を、惜しげもなく犠牲にしたのである。

必勝の信念だけで闘つた戦争も、二十年八月日本の無条件降伏で終わりを告げた。

二十一年二月に復員して間もない私に、吉崎正光さんが農民組合と、消費組合を結成しようと呼びかけてきた。話ほとんどん拍子に運び三月下旬に、鍛冶町にあつた劇場で結成大会を開いた。消費組合には即座に

百人程の会員が加入し、組合長に山中与七さんを選んだが、農民組合の加入者僅か十人ぐらいであつた。組合長に吉崎さんを副に私を推した。その年の六月増田さんがボルネオから復員して来た。しかし体調が優れず、暫く静養していたが秋になって動き出した。農民組合の組織は全村に拡がり、またたく間に五百人を超した。十二月の最初の農地委員選挙で農民組合が勝つて、会長に成田岩蔵さんを選んだ。翌二十二年四月の村長選挙でも増田千代吉さんが当選したのにクレームがついて選挙無効とされた。九月に再選挙を行い、増田さんは大差をつけて当選した。この選挙の対立候補は村一番の旧地主山中勝雄さんであつた。正に嘉瀬村の夜明けであつた。

二十二年四月三十日執行の村会議員選挙でも、定数二十二名の過半数を増田村長派が占め、その後は消防団も団長に原田辰与さんを推して、村長派が制し、村の主要機関の主導権を農民組合が握ることになった。戦前の農民運動の中心スローガン『土地は働く農民へ』これは戦後の農地改革で、不十分ながら念願がかないられた。中央の政権も保守党との連立ではあるが、首班が社会党の片山内閣も誕生した。ほんの一時期、気をよくした農民組合ではあつたが、この社会党内閣も僅か八カ月で、党内左派の反発にあい二十三年一月退陣に追い込まれた。

農地改革と同時に推進されたのは、農業団体の改革であつた。農業会を農協にすることが農村民主化の柱でもあつた、この頃私は農協青年部の前身、農村青年連盟に入って活動していた、県農業会北郡支部に勤務中の山中正津さん、石岡由次さんらのご指導とご協力を得たのはなつかしい思い出でもある。

二十二年十二月農協法の施行に伴い、嘉瀬村には政治的バックで二つ



の農協が設立の準備を急いだ。そして双方が同じ名称の嘉瀬村農協という看板を掲げた。その後一方が『第一』の二字を入れて、これは解決した。ところが容易に解決しない難問があった、それは旧農業会の資産を各々の農協が組合員数に応じて分割することであった。総ての資産評価で双方が合意に多くの時間を要した。

私たちの農協（現在の農協）の創立総会は二十三年一月二十日鍛冶町にあった劇場で開かれた。組合員約五百人、出資金一人十円、今にして思えば、当初から規格外の貧弱な農協であった。総会は型通りに進行したけれども、最後の役員選任をめぐって一破乱が起きた。それは私が何の準備も、予告もなしに突然理事に立候補を表明したからであった。

理事の定数は十人、私は九位ぐらいで入った。その後の組織会では組合長に土岐繁一さん、専務理事に村長でもある増田千代吉さんを選任した。

増田さんは二十一年の夏に南方から帰郷したが、戦地での無理がたたって、当時は不治の病とされた胸や糖尿病に冒<sup>おか</sup>されていた。多くの村民や農民に推され病軀をおしての村長であり、農協専務であった。そして夜は組合の二階で二十人ぐらいの若者たちに資本論など社会科学の学習会を開いて指導もされた。

二十四年二月頃から農民組合は、増田さんの病状はとても村長職には耐えられない、というので退任の時期について相談すること数回に及ぶ。それから間もなく増田さんは在職僅か一年半にして辞任した。五月初めの村長選には、前二回の対立候補山中勝雄さんを農民組合が推したのは妥当かどうか、私には解らなかつた。

増田千代吉先生は五月十六日御家族様と多くの村民に惜しまれながら

三十九歳の若さで巨星が墜ちるように逝ってしまった。農民運動の父を亡くした農民たちの心に大きな穴ができ、組織が音をたてて崩れた。これより先の二十三年暮れ頃、吉崎正光さん、秋元幸之進さんたちが、共産党の嘉瀬細胞を組織して活動をしていた。僅か一年足らずで五十人を越える党に発展、一方で農民組合も数え切れない程の再建大会を繰返した。

増田千代吉先生亡き後、吉崎さんが町議として長く、津川武一先生を国会に送った、津軽の農民たちは雑草のようにいつまでも逞<sup>たくま</sup>しい。

### 雀すずめほーしんじよ

雀 すずめほーしんじよ

どの雀 ほーしんじよ

〇〇すずめ ほーしんじよ

羽根コ ねはでいかれネ

羽根コ けるはで 飛んでこい

雨ふって いかれネ

唐傘 貸すはで とんでこい

鬼 いるはで いがれネ

鬼の 知らネまに とんでこい

### <ふるさとのわらべ唄>

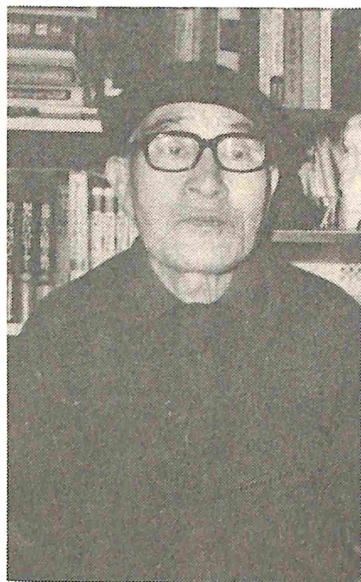


## 検察夜話



### 特高警察の人々

土岐兼房



(土岐兼房氏)

### 第二次世界大戦のころ

私は大東亜戦争勃発の一週間後、台湾の勤務校で逮捕された。治安維持法違反容疑というのである。

台湾では、言葉の通じない人たちと雑居房に一カ月。そのあと送還されて、郷里青森県の大鰐署に一月、青森署に九月半。取り調べがない限り、ほとんど独房ですごした。その間、入浴と散髪は二回だけ。

青森署の監房は、コンクリートの床から三十センチの高さに築かれた、面積四平方メートルの城である。松の十二センチ角七本で格子を張り、左には頑丈な鉄扉が塞いでいるのである。天井の高さは一・九メートル、廊下の突き当たり高い小窓はあるが、房の中までは光が届かない。東隣にもう一つこれと同じ房が続いている。

ここには専任の警官二名が配置され、我々の監視に当たる。

最初のうちは、私も素直に彼等の指示に従っていたが、相手の人柄が分かるようになると、自分の要求を出したり、事によっては、彼等の指

示を拒否するときもあった。特に中沢巡査の用便監視、就寝時の懐中電灯照射、弁当の食べ残し禁止には激しい憤りを感じた。私は抵抗の意味もあって、彼に対し幾回かハリストをおこなった。

彼はこれを克明に日誌に記録し、上司に報告していたのである。

彼は私に対し両眼を涙でぬらしながら、「許してくれ。このように勤めなければ、いつ首になるかも知れないのだ。私が首になったら女房や子供は生活できなくなる。頼むから、私の忠実な勤めを認めてくれ」と頭を下げるのだった。

彼はその後も用便監視と就寝時に懐中電灯を照射することは止めなかった。そこで私は「ポロポロした外国米の弁当は食べられない。ことによればここで死ぬかも知れないよ。」とおどかしてやった。

これが再び報告された事は間違いない。誰言うもなく、第一房は自殺するとうわわさが保護室にひろがった。中沢巡査はまもなく青森水上署に転勤し、保護室の野田巡査がこれに代わった。



特高本部はおお急ぎ、私の取り調べを開始するといってきた。

二階の広間に引き立てられると、正面上座に小野均特高部長、私の専任松原清次郎警視、中村警部補が腰掛にドッカと着席、その左右に数名の部下が突っ立っていた。

川村巡査部長が私に敬礼を命じた。敬礼が済むと左右の部下のうち竹刀を持った者が二名、私の前に立ち、木刀を持った者は私のうしろに回った。川村巡査部長が「隊列は整えました」と告げると、小野部長は、私をにらみつけながら「貴様は死にたいと言っているそうだが、死ぬというなら、そのようにしてやろう」と意地汚い大声で叫んだ。二人の竹刀は廻れ右をして私を見つめた。巡査部長の「用意」の合図に全員は「ヤー」の掛声で突込んできた。

竹刀は両肩に食い込み、木刀は脊柱のあたりを一撃した。

私は仰天して気が遠くなり、仰向けに倒れた。「御苦労、御苦労」というセリフが聞こえたと思った。これは特高出初式の常套語だということとがあとで分った。私が意識を取り戻した時は、川村部長が一人いるだけで誰もいなかった。きつと、どこかで祝杯を挙げていたのであろう。

川村部長は、私を独房に送り込むと、格子の中をのぞくようにして「何も考えなくて、ゆっくり休め。痛みは残らない筈だから」と言い捨てて去って行った。

こんなに両方の肩が腫れ上がったり、背中がジクジク痛むのに、なんであんな事が言えるのだろうか。そう思いながら、私はしばらくすると、このことばに騙されたように一生懸命眠ろうとしていた。

当直の野田巡査は、「俺は先輩の中沢とは違うからな。心配しないで、ゆっくりと釈放を待て」と励ましてくれた。

野田巡査は、時々鍋やきか、中華そばをおごってくれた。夜、眠れない時は仲間や先輩の処世術について興に乗ったまま語ってくれたりもした。

私はしばらく肩の痛みが続いて、昼も寝ている事が多かった。野田巡査は「寝てばかりいるのは健康によくないから、静座をやってみたら」と勧めた。それから痛みも減退したので目が醒めている間は静座に切り替えた。

脅迫の出初式から、一カ月位たった頃、松原警視の立ち会いで警察医の健康診断をうけた。結果は「異常なし」というので幾分明るい気持ちになった。

検挙されて四カ月。さすがの私も取り調べを待ちあぐむようになった。特高の場合、長い間、独房の中に放置しておいて不安感をつのらせ、あせる心をかきたて、その状況に応じて取り調べを始めるといわれる。夜の取り調べもこれにつながるもので、その心理的影響は、計り知れないものがある。

取り調べは事実関係から

― 取り調べ官との問答 ―

最初に「生い立ち」について書かされたが、文語体でまとめたら口語体に書き改められる事になった。松原主任は文中の「小学五年、十一月父死亡のため、父の残した雑貨商を継ぎ……」を引き出し「これじゃこのような人間になるのは当然かも知れない」と表情も変えずつぶやくように言った。

次に文集交換者名を数多く挙げさせたが、訊問はなかった。続いて学歴、学校就職歴を調べられた。

### ○著作活動について

ここで私がかかわった、機関誌、同人誌原稿発表、研究会参加、加盟団体について、それぞれ述べて見たい。

△「呼笛」三年〜四年（二カ年で八冊）

これは私の学級文集で、子どもたちの協同、相互扶助を指導の方針とし、綴方の表現力を養うというのが狙いであった。特高主任は、「時局下、教師として実践的にすれが大きい。貴様は、この子供等の将来、組合の闘士にしようというのだろうか」といい切った。私は「そんなことはどこにも書いていない。生活の中から物事を学ばせるのだ」と答えた。取り調べ官は、「実際の慰問文があればよかったがなあ。」と言う。「呼笛の子供の慰問文なら村の生活が生々しく書かれて、逆に兵隊の士気をくじく結果になったろう」と仮説の攻撃に終始した。

△「北星」（綴方研究会機関誌）（年一回一〜二号）

これは私の編集にかかわるものだが、取り調べ官は、会長名で執筆した私の「巻頭語」の一部分「綴方を武器として云々」を指摘し、「これは闘う子どもを育てようという意図が明白で、この呼びかけは許し難い」としつつこくくいさがあった。私は「表現を新鮮にするため、軽い気持ちでこの用語を借用したまでだ」と弁解したものの「イデオロギーの借用は初耳だ」ときっぱり却下された。

△「北の星」（北津軽綴方研究会発行 児童文集一号一六号）

私は四号の表紙裏に一頁を費して編集あと書きを記した。その終りに数行「郷土の八師団は戦争に強いというのが評判であるが、それだけでは片手落ちだ。昔から、文武両道という事が言われて来たが、まず勉強を身につけて賢い人間になろう」と書きつけた。これが致命傷だった。

俳人で会員でもあった泉谷素石校長はいちはやく、これを取りあげ、「北の星」は赤の食い物にされているというデマをふりまいた。私は、五号で新しい編集者にバトンタッチし、本科正教員目ざして資格取得の学習に専念した。とは言っても前からの関係で、三上斎太郎編集「国語行動」（同人誌）には、児童文研究や原稿は執筆するし、それ以前に、岩手（一の関中里小学校会場）の綴方研究協議会に出席、続いて翌年には秋田の北方性教育協議会（主宰成田忠久―北方教育社）に参加し、「新しい教師観」を提言発表している。運悪くそのメモが出て来たのでどうする事もできなかった。その上、「北日本教育連盟」加盟も判明しているのだから、綴方運動の旗手の烙印は免れる術もなかった。

△雑誌「綴方生活」（主宰小砂丘忠義、創刊―終刊約十年間）

私は熱心な支持者だったが、原稿発表は十回に満たなかった。そのうち、半分は片々たる小編でペンネームだから問題にされる心配はなく、さしあたり槍玉に上がったのは、「綴方器から研究会へ」の一篇であった。これは主人公の教師（村一番の地主の長男で町の乙種農業学校卒業）が、「この面倒くさい子供の綴方をシャンシャンと処理する器械があればなんぼ値段は高くても買いたい」と言ったことをひとつの挿話としてまとめたものである。松原取り調べ官は、「いかに創作だといっても事実だから、このまま見のがすわけにはいかない、貴様は、主人公の教師に対して敵意を抱いている」と釈明を迫った。これに対し、私は「創作一点張り」を主張し突っぱねた。

△「国語教育研究」（菊池護主宰。同研究会会長宮城県一ノ迫校校長）

昭和十二年だったと思う。私の掲載してもらったのは、工藤清治の作品「母のせつない病氣」と指導者（私）の提言と石橋勝治（岩手）と佐



伯三郎（宮城）の三人の研究論文であった。

往復四キロメートルもある隣町の病院から長い間薬を運び続けた事、また、村のゴモン（占師）に祈とうの依頼をするなど、これが親孝行ではないかと私は考えたのである。二人の研究者もこれには全く同感、残された課題は表現の仕上げということであった。

松原主任は文中の「三上（医院）に三十円、鳴海（医院）に三十円借金が多かった」の言葉に目をつけ、「これは根が唯物論につながるものだ」と強調した。

△「教育・国語教育」（千葉春雄主宰。月刊厚生閣発行）

これには私の提言と山中豊光の作品、「ハーモニカ」を出した。研究者は、今井誉次郎（東京品川区小学校）霜田静志（ニールの研究家、新しい芸術教育研修のため渡仏、帰朝後、その普及につとめる）増田勲（奈良女高師附属小学校、西方の一人者）の三人であった。今井氏は「これで真実の生活を学ぶ目を得た」と言われ、霜田氏は「指導者の愛によって救われた」と賞讃。増田氏は、この中から作者の良心を発掘してくれた。

これに対し、松原警視は「何れも甘すぎる、ハーモニカを取った者に何故、時置かず、教訓を垂れなかつたのか、これでは、泥棒しても許されるという不届きな考えを持たせる事になりかねない。貧乏な子に負担している偏向教育だ」と言う。私は「とんでもない誤解だ。学校に出て来ないというだけでも作者には耐えきれない苦悩なのだ。これを孤立させないため、学級の仲間を訓し、学級体制が整ったところで出席を促したのだ。これが成功したという証拠は作品の結び『私はやっと落ちついて学校に行けるようになった』に明らかである」ここで調査官は追求を

納めた。

△「東奥日報」（青森県最大のローカル紙、特集サンデー東奥）

これには、短篇四篇、童謡二十数篇、短歌（募集毎、口語、文語）童話一編、昭和五年から十年にかけて掲載、太宰治も短編が当選しているが、私より後だった。

△「座標」（県統一の文芸誌。淡谷悠蔵竹内俊吉共同編集・月刊）

昭和五年（満洲事変の前年）から二年間続いた。最初の一年は、太宰治が長編「地主一代」を連載。俳句、川柳を除く多くの作品が掲載され、大方の注目するところとなった。

二年目になると、これらの人が後退し新しいプロレタリア文学が台頭したのである。淡谷悠蔵の、新しい農民を取り扱った「解氷期」は、この中で生まれた。

私は二年目から作品を発表するようになった。毎号、短歌（口語中心）二十首、童謡二編を欠かさず送り続けた。童謡は脚色され、西津軽の小作争議で開設された農民学校の子供たちのために、劇に上演された。その台本は「座標」誌上にも発表された。短編の発表は「捨て米」一編で終った。童謡、短歌共、プロレタリア童謡、プロレタリア短歌と銘を打ち、浅川修のペンネームを使った。この調査は詳細を極めたにもかかわらず、治安関係の追求は乏しかった。私の考えた事であるが、「東奥日報」「座標」共に対象が一般不特定者であり、それにペンネームを使用していた訳だから、特に重要視はしなかつたようだ。

但し、松原警視の言によると、「これによって君のイデオロギーは特に尖锐化した」と。

○「台湾渡航の理由」について

房に帰ると、妻からの手紙が三通、束になって入っていた。何れも特高が開封検閲したもので、毛筆で黒く塗りつぶされたあとが点々とついていた。

常夏の台湾で私を待ちかねている妻と息子を思うとたまらなくいとおしさを感ずるのだった。

○社会思想に対する認識

ここではマルクス主義の認識を指しているのだ。

「私は十年前の実践が現在の認識を基準にして評価される事は、諒承できない。私の思想はあれから文検を取るまでに変貌している。批判なら書けるが認識は書けない」と意見を出した。

「批判もよいが、簡単な認識を」と松原主任はしつこい。

「検察は、文検合格の免状を否定するのですか」「いや、そんな事は言っていない。貴様の現在の社会認識をききたいのだ」押し問答をしているうちに、つい書かされる事になった。

私は、平気な顔で資本主義の矛盾を書き進めた。資本主義の社会では、労働者が働けば働く程生活が苦しくなる。これは、労働者の生産を下層から段階的に吸い上げる資本家がいるからだ。資本家はこれを貿易に廻したり、設備投資に使用する。事によっては、相手の国を戦争によって征服し、領土、金品を奪取する。資本主義の社会は景気の変動により、大量の倒産者を出したり失業者を産み出すこともある。この不況は周期的に来るものと見られ、これを恐慌といい、これによって生じる失業者の群を産業予備軍という。資本主義の社会では失業者の群は景気の上昇、下降によって浮沈を繰り返す。資本主義のリーダーたちは、戦争の度に、人類愛、人間のモラルを強調するが、戦争によって汚された社会の荒廃

私は時局柄、村の学校にいて、多くの人々に迷惑をかけるよりも、さっぱりと古い自分を一扫し、新しい自分に切り替えたかったこと、病氣（腎臓手術直後）の妻の治療と、できれば文検（中学教員―現高校教員）を受験し、資格向上をはかりたいと思ったからである。松原特高は、これに対しては、深入りせず、「お蔭で希望は、かなったね。でも、そのおみやげに、治安維持法違反の取り調べとは」と皮肉たっぷりのうす笑いを浮かべた。

○人間交流の調査

文集交換者及び文集名簿に残ったものに丸印をつけさせられた。文通者往復の内容、会見者、会った時、所、話し合い内容、印象、年令、略歴等を聞かれた。

私はできる限り、多くの人名を思い出し、自分の知っている限り、詳細に書き込んだ。これを取り上げながら、手当たり次第に、「誰はどう、誰の文集はどう」というのだから、私は「記憶にない、分らない」と、答えるはかなかつた。どんなにきかれても口を閉ざしていると、ついに先方から、語りはじめた。「秋田、佐々木昂」（北方教育実質的指導者、高等小学校勤務）「山形、村山俊太郎」（綴方生活同人、北方のリーダー）「山形、国分一太郎」（文集「モンベの弟」理論実践の全国的指導者小学校勤務。子供を見る目は、昆虫記のファールブルの如く）「新潟、寒川道夫」（文集、「青い空」松三郎の「山芋」の指導者、詩人童画家、未見）「北海道、横山真」（文集、未見、高等小学校勤務）について全員監房で苦しんでいるという。私はみんなが歯をくいしばって耐えぬいてる姿を想像しながら、「自分も頑張らなくちゃ」と心を引きしめるのだった。



は容易に癒し切れない」松原主任は口をさしはさむ事もなく引き上げた。  
○日本共産党に対する認識

「現在どうなっているか」ときく。

「私は黨員でないから知らない、黨員は殆ど投獄され、ある者は転向を声明し、自殺者まで出ている状況だから、壊滅したと思う」松原主任は、私の手記を興味深く見ていたが、「貴様は、そういう連絡を誰から受け取った」「連絡など来る訳がありますか」私はそんな質問に答えるのがバカバカしくなった。

「共産党の復活を期待しているかどうか、これは心の問題だ」「当局は、私に何を求めているのかはつきりいって下さい」「こちらがいうまでもなく、貴様自身、自分の心にきいてみる」というのだ。何と回りくどい質問だろう。取り調べ官の態度に業を煮やした私は「このくだらぬ誘導質問には答えない事を検事に伝える」と言いきった。松原警視は「早まるんじゃないよ。調べはまだある」とたしなめた。

○天皇制について

天皇一家と政治の関係は今日のように明確ではなかったので、不答をもって終始した。

○コミンテルン三〇年テーゼについて

読んだ記憶がないので「知らない」と答えるほかなかった。ところが主任は、私が持っていた「新興教育」を持ち出して、表紙裏の記事を示した。これがスローガンだったのだが、私は読んでいなかった。最後までそれを貫いた。これが警察での最後の取り調べであった。まる二カ月を費した。

手錠がはずされ、野田巡査は検事室の扉を叩き、私を中に送りこんだ。

○二回目の検事局行き

今日も前回と同じ出で立ちで野田巡査が同行。加藤検事が待っていた。質問は、

「今後の身の振り方について」

「台湾に帰ります」私は即座に答えた。

「妻子が待っているからね。ところで、はっきりとしたイデオロギーの持主は、これから、どう生きるかということだ」

「そういう考えは極力押え、そのような思想は棚上げにして暮します」

「具体的にいつてどういう事ですか」

「今までの自分を乗り越え、ヒューマニズムに徹することです」

野田巡査は「よかったなあ。ご苦労さん」といいながら手に持っていた手錠を自分のポケットに入れた。

十二月としては珍しく明るい北の空だった。松原特高主任は手をもみながら、私たちの帰りを待っていた。

司法書士と二人で作成した「取り調べ資料破棄」の証文に私の捺印が必要だった。捺印がすむと、私は保護室の畳に座って出所を待った。野田巡査が布団と私の身のまわりの品を荷造りしてくれた。「釈放」という石郷岡巡査の声で私はそそくさと立ち上がった。

入口の扉が開くと、母が迎えに来ていた。野田巡査は署の出口まで荷物運んでくれた。母と私は近くの弁当差入店中村屋に一泊した。村に帰ると、もう駐在所の巡査がたずねて来た。忠実な特高代役である。村には、二、三日いて、ぬる湯温泉に出かけ、ここで正月を迎えた。

それから母を連れて再び台湾に渡ったのである。

加藤俊夫検事は正面の座席にどっかと座り、二メートル位離れた処に自分と向かい合うように椅子を置いてそれに私を座らせた。

十一月分の部厚い調査のページを繰って記録の認否をただした。私は事実関係については異存なかったが、特高全員の脅迫的ないわゆる特高出初め式には抗議した。

加藤検事は、これには答えず「健康はどうか、弁当は食えるか」と問題を切りかえた。「ハイ、異常ありません、弁当は残さずに食べております」と答えた。

社会思想の認識については現在の認識と十年前の実践には大きなズレがある事を主張した。

共産党に対する認識ではあまりにも愚劣でその誘導的尋問には反感を覚え、回答を拒否した事実を報告した。加藤検事はこれには答えなかった。取り調べは二時間もかかったらうか。

検事室を出ると、野田巡査は、「釈放が近いじゃないか。元気を出せ」と軽く私の肩をたたいた。房に帰りつくと、昼の弁当が格子の差し入れ口からのぞいていた。

○釈放を前にして

検事局に呼ばれて、一週間ばかりたってから、私は、松原警視に連れられて、街の理髪店に行った。九カ月もハサミをあてず、伸び放題の頭髪を切り落とし、荒っぽい髭武者の顔をさっぱりと剃り上げて貰った。

それから、風呂屋へ廻り、全身の垢を洗い流した。これも十カ月ぶり、松原警視も一緒だった。

この日は往復共に手錠なしののんびりした散歩だった。

釈放の日が駆け足でやって来ている気がした。

土岐兼房とぎかねふさ 先生は私たちが嘉瀬小学校三年・四年の時の恩師である。

土岐先生から生活綴方を教わり、文集「呼笛」は、クラス全員の書いた綴方を先生が指導、編集し、ガリ版を切り、私たちが慣れない手つきで謄写版のローラを転がして手伝って出来た学級文集である。

先生は、明治四十年八月十五日、嘉瀬村大字嘉瀬字雲雀野二六五番地に父土岐只五郎、母サクラの長男として生れました。

小学校五年のとき父を失い、この時から学校へは行っていなかったが、校長のからいで卒業証書はもらったという。

学校へは行けなかったが、小さな雑貨商を営みながら独学、通信教育で検定試験を受け、十九歳で代用教員となる。嘉瀬小に赴任してきたのは昭和九年である。

また、昭和五年ごろから浅川修のペンネームで、東奥日報の文芸欄に短篇小説「捨て米」「奪還一娘」「開犬とくむ」などを発表。

昭和十三年土岐先生は台湾の小学校に勤めることになり、一家は転出して行った。

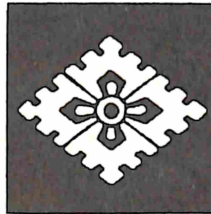
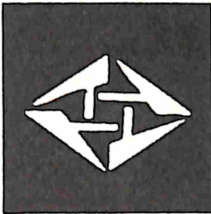
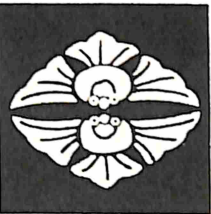
太平洋戦争に突入して、生活綴方運動が治安維持法違反容疑で、台湾の勤務校で逮捕された。その時の事を書いたのが「検察夜話―特高警察の人々―」である。戦後、二一年四月引揚げ、弟の住む八戸へ。その年の暮教壇に立った。翌二二年推されて二・一ゼネストの闘争委員長になったが、スト中止の前に教師たちは「スト不参加」を決めた。土岐先生は「弱きものよ、汝の名は教師なり」と言い、このして教壇を去った。

それから三年間は八戸で下駄の露天商をやった。私と工藤清治君が東京の浅草で、先生とバッタリ会い、下駄の鼻緒の包を運ばされたのも思い出の一つである。四八年六月八日発行の朝日ジャーナル「にんげんシリーズ六一回目」に「六六歳の小学校の先生」というタイトルで取上げられ、『作文先生として土地の人にすっかり信用されているため教育ママも土岐さんのいうことはよく聞くともいいます』と紹介されている。

先生は、日本作文の会の常任委員を長く勤められ、五年ほど前だったろうか、私が上京の際にお邪魔したら、「日本作文の会から表彰された」と嬉しそうに賞状を見せてくれた。先生は、生涯をかけた生活綴方の総まとめともいべきか「生活綴方と共に五十年（仮題）」を近く上梓する。

今は、奥さんの操くささんと二人で、本の中に埋れながら、静かに読書の毎日である。（山 中 正 津）





文

前

昭和五十五年末だ経験したことのない未曾有の大凶作に見舞れた時、実りのない稲を  
手にとつて改めてケガジⅡ貧苦Ⅱ身売りと往時に思いを馳せたことがあった。

マスコミもあらためて凶作に付き纏う過去の娘の身売りの問題を  
取り上げていましたが「青森県農地改革史」の資料によれば昭和六  
年から昭和十年迄（昭和八年は抜けている）の婦女子の身売りは四  
年間で一万八千人に近い数字がでている。八年と十一年を合せると  
少なくとも二万五千人は下らないとみなければならぬ。芸妓、  
娼妓、酌婦、女給、女工、その他と大半は水商売の世界に売られて  
いった。平年作でも小作農民は糊口を凌ぐにやつとの状態では、ひ  
とたび凶作に見舞れるとあまりの貧と、無知と、生地獄の狭間から  
娘を違う世界の生地獄に埋め込めざるをえなかった。

旧嘉瀬村（長富、毘沙門、中柏木）だけでも三十名を超える婦女  
子が売られていった。

娼婦、女工、からゆき、慰安婦と人に生れて人の生活を奪われた  
足跡をたどりながら、虐げられた女姓だけではなく総ての女性の  
真の解放の願いを込めて書いてみたいと思う。



（からゆきさんの眠る日本人墓地）

研究

# 身売り 原田万治

私事にて誠にすまない  
のだが、私が生まれた昭  
和九年は娘の身売りが最  
高に達している時期であ  
った。九年と言えばケガ  
ジの年であったが当時の  
貧農の娘たちは口べらし  
の為アダコという子守り  
に出された。

家でも最たる貧農でありました  
が、貧農は貧農どうしお互にアダ  
コを頼み、前後して四人の子守の  
お世話になったそうですが、その  
なかの一人に十二才になるK子と  
いう女の子がいた。性格がモッサ  
として口数の少ない子であったそ  
うですが、年季があけた春四月十  
三歳の時身売りされたと聞かされ  
たが、若い時は身売りそのものの  
意味が理解できなかったが、今は  
農業を経営する立場にしてケガジ  
に由来する身売りはいかに悲惨で  
あったか身に沁みる気がする。

K子は身売りされる日に親類の  
家に逃げ込み、座敷の隅にうずく  
まりながら行きたくないと泣きし

やくったという。いたいけな吾が  
娘を生活の為とは言え、心を鬼に  
して東京の吉原へ娼妓として売ら  
なければならぬ、両親の気持は  
断腸の思いをこして悲通であった  
に違いない。K子の後日譚はま  
めの項でのべることにしますが、  
幕藩体制下のケガジは、生産者自  
体の百姓の餓死型を意味し、明治  
のなかばから大正初期におけるケ  
ガジは、自作農から小作農への転  
落型で、それに続く昭和のケガジ  
は娘の身売り型を辿っている。

女性たちは前歴を隠すのみで語る  
ことさえ拒否するのである。いか  
にまともに取材しようとしても男  
なるがゆえに敬遠されるのは仕  
方ないが、その裏にはいまだに  
女郎上りという差別の思想が彼女  
たちを取り囲んでいることを直感  
的に会得しているからなのである。  
娼妓の世界をみる時、世の男性  
は自らの欲望好事のこののみ重視  
して、政治、経済、民浴の立場か  
ら救いあげようとする運動が一部  
にあったが、必要悪との見解から  
むしろ公娼制売春を野放しにして  
きたのが実情で女性の解放は女性  
でなければならなかったのは歴史  
の証左である。

## 原始女性は太陽

原始、女性は太陽であった。で  
始まる明治時代の「青鞥」の人間  
的に目覚めた進歩的な女性誌ではな

いが、石器、縄文時代全期を通し  
て母系家族であった。その集団の  
なかにおける女性の位置づけは女

